

「男、突っ走る！」

第26回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内	雅也 (18)	中央高校3年2組生徒
木内 孝志 (47)	雅也の父	
木内 真保 (45)	雅也の母	
木内 健次郎 (14)	雅也の弟	
山辺 一磨 (18)	中央高校3年2組生徒	
尾形 安代 (54)	中央高校3年2組担任	
藤堂	名古屋芸術専門学校講師	
吉野	名古屋芸術専門学校事務局職員	

一 中央高校・校門前

雅也が慌てて靴を履いている——一磨が通りかかる。

一磨「あれ、今日珍しく帰るの早いじゃん」

雅也「うん。ちよつと今日はどうしても早く帰らなきゃいけないくて、じゃあね。また明日」

と、走り去っていく——不思議そうに見送る一磨。

二 道

自転車を漕いでいる雅也。

三 木内家・玄関

雅也が慌てて帰宅する。

雅也「ただいまッ」

四 同・居間

雅也が入ってくる——孝志、真保、健次郎が迎える。

孝志「おかえり」

雅也「ただいま……。いや、おかえりはこっ
ちのセリフだよ」

健次郎「長かったよね、七年」

真保「本当。七年もいると、あんなに荷物溜
まるもんかしら」

雅也「結構あったの？」

真保「まさかあんなに段ボール箱が運ばれて
くるなんて思わなかったもん」

健次郎「どうせ余計なもの買ったんでしょ」

孝志「健も言うようになったな」

雅也「最近どんどん生意気になったんだから。
父さんが福岡に行ったのが七年前、あの時
小学一年生だった健も今や中学二年生なん
だから」

孝志「よその子どもの成長は早いつて言うけ
ど、单身赴任で家を空けてると、自分の子
どもの成長も早く感じるもんなんだな」

真保「そうかもね」

N「十一月の半ば、福岡に单身赴任をしてい

た父が、七年の単身赴任を終えて家に帰ってきました。我が家で家族四人が揃う久しぶりのでもありました。ですが、そんな家族の余韻に浸る余裕は、正直ありませんでした」

㊦ 同・雅也の部屋（夜）

シナリオの勉強をしている雅也——机の周りに参考書が並んでいる。

N 「脚本家になるために、僕はシナリオ教室の通信教育で学びながら、制作会社に原稿を売り込むという、独自路線で進路を決めようとしていましたが、これもなかなか決まることはありませんでした。AO入試や就職試験に合格し進路が決まる一方で、就職試験に落ちたことで急遽進学に進路変更する者もいたり、僕も含めて、落ち着かない日々を過ごす者は少なからず何人もいました」

自販機でジュースを買っている雅也と
一磨が話している。

雅也「あれ、その大学って良樹が行くところ
じゃん」

一磨「うん。ようやく、ここにしようって
い
う大学が決まって良かった」

雅也「じゃあ、あれも受けるの？ ほら、進
学希望者だけが参加する補習授業」

一磨「全部じゃないけど、一応国語と数学は
受けようかと思ってる」

雅也「そっか。お互い、なかなか決まらない
ね……」

一磨「木内のほうはどうなの？ 脚本家のこ
と、決まった？」

雅也「それが、なかなかね……」

一磨「木内も、大学か専門学校に入ったらど
う？ このまま決まらなかったら、就職浪
人になっちゃうぞ」

雅也「だよね……」

険しい顔の雅也。

↳ 木内家・雅也の部屋

雅也が学校から帰宅する――パソコンの電源をつけて、椅子に座る。

N 「かっちゃんの言う通り、このまま決まらなかつたら、自分は就職浪人になってしまふ。どうすれば良いのかと、不安な日々が続いていました」

雅也、インターネットを立ち上げ、

『名古屋 専門学校 脚本』と検索し、ホームページを見ていく。

N 「名古屋で脚本の学べる大学や専門学校はないかと、僕はインターネットで検索し始めていました。行くか行かないかはさておき、何か参考になるのではないかと思っていました。資料請求で取り寄せたパンフレットが届いたのは、それから数日後のことでした」

パンフレットを見ている真保——傍らに雅也。

真保「名古屋芸術専門学校？」

雅也「そう。名古屋の栄にある学校なんだけど、（とパンフレットのページをめくり）ほら、シナリオライター専攻っていうのがあるでしょ」

真保「確かに、通信教育のテキストで学ぶより、こういった専門学校で時間をかけてちやんとした技術を学ぶっていうのも、方法の一つか」

雅也「ずっと就職希望だったから、学費の余裕なんてうちにないのは分かっているけどさ……」

真保「あんた、そんなこと心配してたの？」

雅也「父さんがいない間、母さんがどれだけ家計のこと気にしてたか、俺が知らないと思っただ？ シナリオの通信教育のことだつて、本当はもっと早く言い出したかったぐ

らいだったんだから」

真保「もし、あんたが専門学校に行きたいと思っただら、その時はその時に決めれば良いことよ。家計を心配して、変に我慢する必要なんてないんだから」

雅也「……」

真保「一回、オープンキャンパス行ってみる？」

雅也「うん……申し込みしとく」

6 名古屋・栄駅（数日後）

地下鉄の階段を上ってくる雅也と真保。

10 栄の街

人が行き交う中、地図を見ながら雅也と真保が歩いている。

11 名古屋芸術専門学校・表

高校生や保護者たちが、次々と入っていく——雅也と真保がやってくる。

真保「ここじゃない？」

雅也「あ、本当だ。『名古屋芸術専門学校』
って書いてある」

と、中から事務局職員・吉野茉由（24）
が出てくると、

吉野「オープンキャンパスの方ですか？」

雅也「はい……」

吉野「こちらで受付をします。さあ、どうぞ」
と、雅也と真保を中へ促していく。

22 同・八階・プレゼンテーションルーム

雅也やその他の高校生たち、真保や保
護者たちが聞いている中、吉野が学校
紹介をしている。

N 「オープンキャンパスの最初は、入学事務
局の吉野さんによる、学校紹介がありまし
た。パンフレットにも記載があったように、
僕がこの学校に魅力を感じたのは、講師が
業界の専門家であることと、授業がより専
門性の高いところでした」

パソコンがいくつも並んでいる部屋。

講師・藤堂香（53）が授業をしており、雅也や高校生が数人、体験授業を受けている。

藤堂「普段、この学校の小説専攻とシナリオ専攻の授業を担当している、藤堂香と言います。本業はコピーライターです。普段の授業では、小説や脚本を書くために必要なアイデアを鍛えるための授業や、文章の基礎を教える授業を担当しています。なので今日は、せっかくなので普段の授業でやってお話を一つ、知識として覚えていつて帰ってくれたらと思います」

と、ホワイトボードに図を描いていく——その様子を見ている雅也。

藤堂「コピーライターしかり、小説家や脚本家もですが、クリエイターというのは『送り手』と呼ばれる、情報や作品を発信する

側になります。普段、みんなは漫画や小説を買って、読者として『面白いな』と思って読んでくでしょ。これは『送り手』の逆で『受け手』という立場になります。好きな作家や作品がある以上は、『受け手』となって読むことも大事です。でも、ずっと『受け手』のままではいけないんです。世の中に作品を出す以上、私たちクリエイターというのは、常に『送り手』でなければいけません。そのために、アイデアをどんどん出す必要がありますが、もちろんあれもこれもってすぐにアイデアが出るわけじゃありません。でも、何かすぐに作るうと思うために、メモを取ったり、知識を入れることで、自分の引き出しを増やしていきます。そうすることで、どんどん自身アイデアマンとなって、作品に生かしていきます。『こんなのは作品に関係ないや』って、せっかくの発想を捨てないでください。ネタはどこに落ちてるか分か

らないし、それを拾うものは早いもん勝ちです。なるべく多くのネタを拾ってみてください。好きな作品を読む以外にも、人物観察を試みたり、散歩を試みたりするのも良いし、普段とは違うことをしてみると良いと思います」

雅也「（挙手をして）あの、質問良いですか？」

藤堂「どうぞ？」

雅也「普段とは違うことって、具体的にどんなことをしたら良いですか？」

藤堂「（書類を見ながら）えっと、木内君ね。」

普段、学校にはどうやって通ってる？」

雅也「自転車で通ってます」

藤堂「じゃあ、大体いつも同じ通学路を使ってるわね」

雅也「はい」

藤堂「行きは登校時間もあるだろうけど、例えば帰り道、いつもと違う道を通ってみるの。遠回りでも良いし、普段通ってる道の

途中にある狭い道を通ってみたり。普段と違うっていうのは、そういうことなの。何なら、今日この学校に来るまでの道のりだって、行きと帰りじゃ違うと思う。それが、普段と違うことをするってことなの」

雅也「ありがとうございます」

藤堂「普段小説や脚本といった文字に触れ合うみんなに、もう一つ話をするわね。みんな、芥川賞と直木賞って知ってるわね。この違いって、分かる？」

首をかしげる雅也たち——藤堂、ホワイトボードに書いていきながら、以下の説明をしていく。

藤堂「両方とも名誉ある賞なんだけど、それぞれ全然違うものがあるの。芥川賞っていうのは、『この作品が面白いな』っていう作品が評価される賞なの。逆に直木賞は、『この作家は今後も売れるな』っていうのが根底にある賞なの。他にも分類されるものがあったね、芥川賞は芸術的な作品なの。

例えば、ピカソの絵ってあるでしょ。あれって、パッと見てこれ何だろうって思うことあるじゃない。でもあの絵を書くにあたって、ピカソの世界観ができてるわけ。芥川賞もそれと一緒に、作家独自の世界観が評価されるの。それに対して直木賞っていうのは、ミステリーや恋愛や学園といった、ストーリー性やキャラクター性が重視された一般文芸作品に対して送られるの。絵で言うと、『リンゴの絵』とか『犬の絵』みたいなに、一目でどういったものかが分かってことね」

N 「藤堂先生の授業を受けて、僕が思ったのは、シナリオの技術よりも、もっとクリエイターとして本質的なものを学ぶ必要があるのではということでした。体験入学でありながら、藤堂先生の授業は、とても印象に残るものでした」

雅也と真保が歩いている。

真保「どうだった？ 授業」

雅也「何か、すごかった」

真保「どうすごかったの？」

雅也「脚本を書くための技術とかじゃなくて、もつと根本的に、クリエイターに必要な資質みたいなのを学んだ気がする」

真保「ここに入学したい？」

雅也「……」

真保「学費のことはさておき、まずはあんたが、あの学校に行きたいかどうかを聞いてるの」

雅也「そりゃ……行けるものなら行きたいよ。技術以外にも、学べるものがあると思うし……一緒に作品を作れる友達も作りたいし……」

真保「そう……」

雅也「……」

真保「まずは受験だけでもしてみたら？」

雅也「……」

真保「学費のことは、また父さんとも考えるから」

雅也「うん……」

㊦ 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がITパスポートの勉強をしている。

N「通信教育で脚本のことを学ぶ一方で、僕はITパスポートの受験勉強と、情報処理検定プログラミング部門一級の検定と、普段の授業や宿題とは別に、三つの勉強を抱えていました。大変だとは思っていましたが、自分で選んだことだということもあり、決してそれを苦に思ったことはありませんでした」

雅也、あくびをしながら背中を伸ばす——と、ノック音が聞こえ、健次郎が入ってくる。

健次郎「おかえり」

雅也「ただいま」

健次郎「専門学校、どうだった？」

雅也「兄ちゃん、そこに行こうと思ってる」

健次郎「働かないの？」

雅也「脚本家になるためには、もっと他の勉

強も必要だと思ったの」

健次郎「ふーん」

雅也「勉強嫌いなお前には分からんか」

健次郎「そんなことないし」

雅也「ただ…：本当に、あの学校に行けるか

どうかは分かんないけどね」

健次郎「どうして？」

雅也「小学校や中学校と違って、大学や専門

学校に行こうと思うと、お金がかかるんだ

よ」

健次郎「そうなんだ」

雅也「だから、そのこともちゃんと決めない

といけないの」

健次郎「へえ」

雅也「まあ、こんな話、健次郎には難しいか」

難しい顔の雅也。

16 同・居間

台所で夕飯の支度をしている真保——
ふと手を止めると、雅也の声がよみが
える。

雅也の声「そりや……行けるものなら行きた
いよ。技術以外にも、学べるものがあると
思うし……一緒に作品を作れる友達も作り
たいし……」

真保「学費、どうしようかな……」

17 中央高校・校門前（翌朝）

生徒たちが登校している。

18 同・職員室前の廊下

雅也がやってくる——職員室から安代
が出てくる。

雅也「安代先生」

安代「あら、木内君。おはよう」

雅也「おはようございます」

安代「どうしたの？」

雅也「ちよつと、安代先生に進路のことでお話が……」

安代「どうしたの？」

雅也「僕……専門学校に行くことにしました」

安代「え？」

雅也「昨日、オープンキャンパス行ってきたんです」

安代「どこの専門学校？」

雅也「名古屋芸術専門学校っていう、デザイン系の学校なんですけど、そこにシナリオライター専攻っていう学部があつて、そこなら脚本の技術も勉強できると思ったんです」

安代「その学校で、木内君は自分の学べるものがあると思つたのね？」

雅也「はい。技術以外にも、クリエイターに必要な資質的なものも学べるような気がして……。体験授業を受けたんですけど、授業を担当してくださったのが、コピーライ

ターの先生だったんですけど、知識とかの話もしてくださって。脚本家に必要なのは、脚本が書けるテクニク以外にもあるんじゃないかと思ったんです」

安代「入沢先生と松野先生から聞いたけど、今、ITパスポートの勉強と情報処理検定の勉強もしてるんでしょ？ 進学となると、補習授業が必須になるけど、負担にならない？ 私、そこがちよっと心配してるころ」

雅也「……」

安代「進路が決まらないことに慌てて、無理に進路を決めてなければ良いけど」

雅也「それは違います。僕はただ、今のままではどうあがいても脚本家にはなれないってことに気が付いたんです。技術以外にも、もっと学ばなきゃいけないことがあるような気がして……」

安代「そう……。木内君がそこまで覚悟を決めてるんだったら、私も応援するわ」

雅也「安代先生……」

安代「これから忙しくなるかもしれないけど、自分で決めたんだったら、諦めずに頑張りなさい」

雅也「はい……」

安代「さ、そろそろチャイム鳴るから、教室戻りましょう」

と、歩いていく雅也と安代。

N 「安代先生の言う通り、専門学校に行く準備のことを考えると、さらに自分の負担が増えていくことは、想定範囲内でした。しかし僕にとっては、どれもが大事なことだからこそ、例え大変な思いをしてでも全てを成し遂げたいと思っていました」

つづく